

# “一方的だけど、一人じゃない”

## ～ “推しと私” の「人間関係」～

池田 太臣

(甲南女子大学人間科学部・文化社会学科)

### 新しい人間関係？

以前、この『女子学研究』の誌面で、「果たして“推しのいる生活”は、今後、社会に受け入れられていくのか？」と書いた(池田 2020: 11)。その後の様子を見てみると、社会は“推しのいる生活”を受け入れているようにみえる。2021年1月、宇佐見りんの『推し、燃ゆ』が、第164回(2020年度下半期)芥川龍之介賞を受賞したことは記憶に新しい。その年、「推しを応援する活動」という意味の「推し活」がユーキャン新語・流行語大賞にノミネートされた<sup>1</sup>。

「推し」とは、「あるジャンルの中で一番好きなモノ・ヒト」という意味になると思われる。あるいは、さらに意味が変容して、「大好きなモノ・ヒト」くらいの意味でも使われているようである。

もともとはアイドルファンが使っていた言葉と考えられる。アイドルグループの中の「一推しのメンバー」が「推しメン」と略されるようになり、さらには「推し」だけで使われるようになった。そして、やがて「人物」以外の対象にも使われるようになったとされている<sup>2</sup>。

さて、先に述べた『推し、燃ゆ』の作者・宇佐見りんは、アイドルオタクである主人公とアイドルとの関係について、以下のように興味深い発言をしている。

— [インタビュアー] あかり [物語の主人公] にとっては、まさに推しの存在が生きがいになっていますが、家族や周囲には理解されません。(現実の男を見なきゃあな。行き遅れちゃう)と言われるなど、一方的な関係は不健全だと捉えられがちです。

[宇佐見] 私にも8年推している俳優さんがいるのですが、確かに、熱量の方向性で言えば一方的な関係です。どれだけ推してもほとんどの場合、パフォーマンス以外には向こうから返ってくるものはない。<sup>3</sup> だからといって、家族関係や友人、恋人関係といった、他の人間関係に引けを取るとは思っていません。それらと並ぶ、一つの新しい人間関係だと思っています。<sup>4</sup> (□内は、池田の補足。以下同)

宇佐見の言う「一つの新しい人間関係」とは、どのように考えることができるだろうか。本稿では、宇佐見の“問いかけ”を導きの糸としつつ、「推し活」や「推しのいる生活」、そしてアイドルとファンとの関係について考えてみたい。

<sup>1</sup> 自由国民社、2022、「第38回 2021年 ノミネート語」『「現代用語の基礎知識」選 ユーキャン新語・流行語大賞』、<https://www.jiyu.co.jp/singo/>、最終アクセス 2022.03.13

<sup>2</sup> 「(書評)『推し、燃ゆ』 宇佐見りん(著)」『朝日新聞』2020年10月17日朝刊

<sup>3</sup> 砂田明子、2021、「芥川賞受賞『推し、燃ゆ』の宇佐見りんが語る「推し」と“癒し”の関係 恋人とも家族とも違う、推しという存在」、『gendai.ismedia』、<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/80323?imp=0>、最終アクセス 2021.04.25

<sup>4</sup> 砂田明子、2021、「芥川賞受賞『推し、燃ゆ』の宇佐見りんが語る「推し」と“癒し”の関係 恋人とも家族とも違う、推しという存在」、『gendai.ismedia』、<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/80323?page=2>、最終アクセス 2021.04.25

## 「推し」とは何か

まずは、「推し」とはどのような存在と言えるだろうか。現在では、「推し」はさまざまな対象に使われる。そのため、「推し」を考える際に、どの種類の「推し」なのかを限定する必要があるだろう。ここでは、「人物」に限定して考えていきたい。

まず、その言葉の適用範囲から考えてみる。単純に言って、「推し」とは、とりあえず“自分の大好きな人”であろう。だが、例えば、自分の恋人を「推し」と呼ぶだろうか。あるいは、親が子どもを（あるいは子どもが親を）「推し」と呼ぶだろうか。どちらの場合も、違和感を覚えるに違いない。他方で、アイドルや俳優、YouTuber が対象であれば、遠慮なく「推し」という言葉を使うだろう。

以上のことから考えるに、「推し」とは、“大好きな人”で、“日常生活の外の人物”あるいは“自分にとって手の届かない人物”と言える<sup>5</sup>。

「推し」が“日常生活の外の人物”であることは、非常に重要である。その理由は、①自由に選べるということ、②日常生活を超えたまとまりをもたらすこと、の2つである。

まず、日常生活のなかの限定された人間関係内ではないために、日常生活の範囲よりも、ずっと広い世界から選ぶことができる。そのため、より自分好みの相手を探すことができる。自由に、“より強く惹かれる人物”を選ぶことができる。

次に、「推し」は、“日常生活を超えたまとまり”をもたらす。「推し」は、日常生活を超えたところに存在している。日常世界の狭いサークルを超えている。そのため、普段は異なった生活圏に属している人びとから“共通の感情”（この場合「大好き」）を引き出して、“日常世界を超えた関係”をつくり出す契機となる。『推し、燃ゆ』でも、SNS 上でつながったファンの描写がある。

いもむしちゃんの文面からは愛嬌と勢いが滲み出ている。年齢も学校も住んでいる地域ももちろんばらばらで、彼女ともその他の人とも推しやまざま座〔主人公の推しが所属するアイドルグループの名〕のファンであるという一点だけで繋がった。それでも、朝起きてあいさつし、月曜日の朝に不平不満を言いながら通勤通学し、金曜に「推しを愛でる会」と称して自分の推しのお気に入りの写真をひたすら投下し合って、あれもこれもかわいいやばいと言いながら一緒に夜を更かしているうちに、画面越しに生活を感じ、身近な存在になった。(p.35)

日常生活の中に同好の士を探そうとしても、なかなか難しいことが多い。そのため、仲間を探そうと思うならば、自分も日常生活の外にでていかないといけなくなる。現在では、SNS があるので、同じ「推し」の人とつながりやすくなった。次のファンの話は、とても納得できる。

彼女はワン・ダイレクションへ向けた自分の情熱を友達に隠してはいないが、彼らの髪型や最新のミュージックビデオについて話すのに友達の所へは行かない。代わりに、彼女はツイッターへ向かい、他のファンたちとこのグループについて熱心におしゃべりする。(ダナ・ポイド 2014 : 65)

SNS は、日常を超えた関係を提供してくれる。だから、ファン仲間をつくるのには、非常に適したツールだといえよう。ファンと SNS の相性の良さは、両方とも、「日常生活の外」に志向しているところにある。

---

<sup>5</sup> とはいうものの、私の所属する大学の学生たちに意見を聞くと、身近な存在（例えば、学校の先輩や先生など）にも、「推し」という言葉を使うようである。この場合も、ある種の距離感（すなわち“直接の知り合いでない”あるいは“知り合いだが恋愛感情はない”など）が伴っているようである。

こうして形成されるのが、ファン集団（＝ファンダム）である。ファン集団は、おおむね、日常では会わないような人々同士から形成されている<sup>6</sup>。

## アイドルファンの行為領域

「推し活」あるいは“推しを推す行為”、いやもっと広げてアイドルファンの行為は、どのようにとらえることができるだろうか。

まず、アイドルファンの行為の領域を定義しておきたい。その定義とは、次のものである。“あるアイドル側から様々な情報・モノ・コト等が提供され、当該アイドルを好きな者たちが個人的に・集団的に、それぞれの程度と頻度とやり方で、それらに方向づけられる行為の領域”と言える。当然のことながら、この行為領域には、ファン同士の相互行為も含まれる。さらには、ファンとファン以外の人びとのかかわりも含まれる。この領域を、ここでは“アイドルファンの行為領域”と呼んでおこう。

定義内の“アイドルを好きな者たち”の部分、“アイドルを嫌いな者たち”に変えれば、アンチファンの行為領域の定義にもなる。ファンの行為領域とアンチファンの行為領域は、同じように“アイドルに方向づけられた行為領域”ということで、広い意味でのファンの行為領域を形作っている。

## “推し遊び”としての「推し活」

“アイドルファンの行為領域”の中でも、アイドルを応援する行為、すなわち「推し活」（あるいは「推しを推す行為」）は、一種の「遊び」ととらえることができる。つまり、“大好きな相手との戯れ（個人的ないし集団的な）”である。いってみれば、“推し遊び”である<sup>7</sup>。

もちろん、アイドルファンの行為は多岐にわたり、その時々々の活動でさまざまな“遊び”の様相を呈する。そのなかで一番わかりやすい“推し遊び”の例としては、“恋愛関係の模倣”（ロジェ・カイヨワのいう「ミミクリ」にあたる<sup>8</sup>）の遊びが挙げられる<sup>9</sup>。

主に地下アイドルのライブでファンたちが叫ぶコールの中に、「ガチ恋口上」というものがある。もっとも典型的と思われる形は、以下のとおりである。

言いたいことがあるんだよ  
やっぱり〇〇はかわいいよ〔〇〇には、「推し」の名前が入る〕  
好き好き大好きやっぱ好き やっと見つけたお姫様  
俺が生まれてきた理由 それはお前に会うため  
俺と一緒に人生歩もう 世界で一番愛してる  
あ・い・し・て・る

通常、好きな相手に向かって、「好き好き大好き」とか「世界で一番愛してる」とかと叫ぶことはないだろう（しかも集団で）。また、この口上は、多少の違いはあるだろうが、ある程度定型化している。それらを考えると、まさに“好きごっこ”あるいは“恋愛ごっこ”と言える。

<sup>6</sup> いうまでもなく、そうでないファン同士の関係も存在している。親子でファンをしている場合（私は“家庭内ファンダム”と呼んでいる）、職場仲間、学校仲間のなかでファンダムを形成している場合などである。

<sup>7</sup> カイヨワの言い方（＝「こわがる楽しみ、あるいはこわがらせる楽しみ」）を借りるならば（カイヨワ 1958=1990：121）、ファンの遊びは“好きになる楽しみ”であろう。“こわい”という感情を楽しめるように、“好き”という感情も楽しめるのである。

<sup>8</sup> カイヨワは、遊びを4つに分類している（カイヨワ 1958=1990：44）。すなわち、アゴン（競争）、アレア（偶然）、ミミクリ（模倣）、イリンクス（眩暈）の4つである。

<sup>9</sup> カイヨワ自身もファン活動（彼の挙げる例は「スター崇拜（信仰）」）をミミクリの領域にあてている（カイヨワ 1958=1990：106、201-211）。

もちろん、「遊び」とか“ごっこ”とかという言葉で、“熱心さが足りない”とか“本気でない”とかといいたいわけではない<sup>10</sup>。周知のとおり、ファンの熱量は相当である。お金も時間も惜しめない。場合によっては、仕事よりも熱心なときさえある。ただその場合、アイドルファンたちは、「遊び」に本気なのである。あくまでも「遊び」に本気なのであって、対象のアイドル個人に“本気で恋愛”しているわけではない<sup>11</sup>。加えて、“両者は区別されなければならない”という規範意識が強く存在している<sup>12</sup>。その規範を守りながら、恋愛関係の模倣という遊びを楽しんでいるのである。

## ロジェ・カイヨワの定義から

先にも述べた通り、アイドルファン行為の領域は広い。それぞれに異なった「遊び」の場面がある。アイドルと同じ格好をしたり（ミミクリ）、コンサートで盛り上がったりする（イリンクス）。ファン同士で「推し」の視線を奪い合い（アゴン）<sup>13</sup>、推しのランチェキ<sup>14</sup>を運よく引き当てるかどうかに一喜一憂する（アレア）。そもそも「推し」との出会い自体が偶然の産物であり（アレア）、それゆえに出会えた嬉しさも格別である。

「推し」について、できるだけ情報を集め、あれこれと思いを巡らし、自分なりの（だけの）アイドル像をつくりだす（解釈のゲームといえる。『推し、燃ゆ』の主人公はこの「遊び」を楽しんでいた<sup>15</sup>）。アイドルの活動に長期間立ち合い、協力し、思い出とそれから構成されていく「成長の物語」を楽しむ。

「推し活」の「遊び」としての側面をより明確にとらえるために、ここでロジェ・カイヨワの「遊び」の定義を参照してみよう。カイヨワは、その著書『遊びと人間』（1958年）にて、「遊び」を次のように定義している（カイヨワ 1958=1990：40-41）。

- |            |             |
|------------|-------------|
| (1) 自由な活動  | (2) 隔離された活動 |
| (3) 未確定の活動 | (4) 非生産的活動  |
| (5) 規則ある活動 | (6) 虚構の活動   |

(1) 自由な活動とは「遊戯者が強制されないこと」を指している。「推し活」は、決して強制されたものではない。客観的には自由な活動である。しかしながら、活動していく中で「義務」のように感じられてくるところが興味深い。

(2) 隔離された活動とは、その活動が「あらかじめ明確な空間と時間の範囲内に制限されている」ことを指す。たとえば、街で歩いているアイドルを見かけても、声をかけることはない。これは、ファンとしての振舞いは、日常生活とは隔離された時空間でのみ許されることを示している。

<sup>10</sup> カイヨワの言うように、むしろ真剣さや熱心さがなければ「遊び」は成立しないだろう（カイヨワ 1958=1990：291）。

<sup>11</sup> “遊びに本気”であるのと“アイドル個人に本気で恋している”ことの違いは、もちろん相対的なものである。いうまでもなく、“本気で遊ぶ”ためには、それを恋愛感情と表現するかどうかは別としても、“アイドル個人への思い入れ”がある程度必要だろう。

これはまったく個人的な見解だが、「推し」という言葉は、非常に興味深い言葉だと思う。というのも、“対象への強い思い入れ”を、恋愛に関わる言葉に頼らないで表現しているからである。“思い入れの強さ”と“それでも存在する距離感”を絶妙に表現した言葉なのではないだろうか。

<sup>12</sup> 仮に本気でアイドルに恋をしているとして、その感情を当のアイドルに対して明確に表現することは憚られるし、表現しても歓迎はされないだろう。これは内面の問題ではなく、ファンとアイドルの関係内の規範の問題である。そもそも、アイドルに対する「本気の恋愛感情」を「ガチ恋」（あるいは「リアコ」ないし「リア恋」（＝“リアルに恋している”の意味））と区別すること自体が、その規範の存在を明確に表している。

<sup>13</sup> この点に関しては、池田の論文を参照のこと（池田 2021）。

<sup>14</sup> ランダムチェキの略。前もって撮影されたチェキを、一定額を支払って、ランダムに選んで入手するものである。ライブ後に行われる物販・特典会において、その場で撮影されたチェキとは区別される。前もって撮影されるため、普段の衣装とは違う衣装であったりアイドルの凝った落書きがなされたりする。それゆえ、貴重なチェキと言える。特にコロナ禍においては、「推し」の「マスク無し」のチェキが手に入るので、ファンにとっては格別に貴重であろう。

<sup>15</sup> 小説で描かれる主人公のアイドル解釈の試みは、“アイドルとの同化”の試みとも解釈できる（p. 21, 109-110, 123-124）。その意味では、ミミクリにあたる（カイヨワ 1958=1990：58-59）。

とはいうものの、アイドルファン行為の境界は、実は意味的なものである。例えば、サッカーや野球といったスポーツゲームなどと異なり、時間と空間で明確に区切られるものではない<sup>16</sup>。例えば、ネットでアイドルの情報を集める行為があったとしよう。「仕事のために必要」という理由のもとで行われていれば、それは「仕事」の領域に属する。他方で、『推し』の情報収集」という意味付けであれば、アイドルファン行為の領域に属する。外観は同じであっても、行為の意味付けによって、どの領域に属する行為なのかは変わってくる。したがって、「推し活」（および広くはアイドルファン行為すべて）は、“意味的に区別されるという意味”では、「隔離された活動」といっても問題ではないだろう。

(3) 未確定の活動については、カイヨワは次のように説明している。「ゲームの展開が決定されていたり、先に結果が分かっていたりしてはならない。創意の必要があるのだから、ある種の自由がかならず遊戯者の側に残されていなくてはならない」。これは、いうまでもなく、「推し活」に当てはまる。アイドルとの関係をどのように楽しむかは、大まかには制約があるものの、個人の自由の余地がある。

(4) 非生産的活動は、「財産も富も、いかなる種類の新要素も作りださないこと」を指す。カイヨワによれば、「遊戯者間での所有権の移動をのぞいて、勝負開始時と同じ状態に帰着する」という。このことも、「推し活」にも当てはまるだろう。むしろ、活動資金がかかるため、財産も富も減る一方である。

ただ、「いかなる種類の新要素も作りださない」という点には、疑問が残る。確かに、富を生み出す（＝利益を得る）ことはないかもしれない。しかし、見ようによっては、ある種の“生産性”をみいだすことができる。

カイヨワが「生産」という言葉を使っているため、どうしても物質的なものにとらわれてしまう。しかし、「推しを推す」行為は、むしろ精神的な効果大きい。この点は後述する（本稿 p.8）が、「推しを推す」ことの効果は、精神的ないし意味的なものである。また、「推し」を持った前と後では、ファンの生活はがらりと変わる。このような効果があることは、指摘しておいていいだろう。

(5) 規則のある活動とは、「約束ごとに従う活動」であることを意味する。いうまでもなく、「推しを推す」行為には一定の規則が要求される。先ほど、ファンからのアイドルへの恋愛感情の規制の例を挙げたが、ファンの行為には、集団的な規範が存在している。それゆえ、あてはまるといえるだろう。ただ、カイヨワは「この約束事は通常法規を停止し、一時的に新しい法を確立する。そしてこの法だけが通用する」と説明するが、そのような言い表し方が適切かどうかは、疑問が残る。

最後に(6) 虚構の活動は、「日常生活と対比した場合、二次的な現実、または明白に非現実であるという特殊な意識を伴っている」ことを指している。これも「推し活」にあてはまっているといえる<sup>17</sup>。

アイドルとファンとの相互作用の領域は、きわめて虚構的である（次ページの図も参照）。この場合の虚構とは、脱日常的という意味である。まずアイドル自身は、肉体を持った人物として存在しているが、虚構の（バーチャルな）存在である。アイドルは、自分の日常生活のリアルを脱して演じられている存在である<sup>18</sup>（その上で、一部を利用することがある。たとえば、高校生とか大学生とかといった社会的地位など）。次にファンも同様に、自分の日常生活上のリアルを離れて、ファン活動を楽しむ（身分・個人的な情報を明かさないう、実名でなくハンドルネームでやりとりするなど）。日常生活の役割を離れて行われる。こうした虚構性ないし脱日常性は、カイヨワの言う「虚構の活動」に当てはまると思われる<sup>19</sup>。

<sup>16</sup> インターネットとモバイル端末の普及は、アイドルファン行為を時間と空間の制約から解放した。大尾侑子はこの事態を「フルタイム・ファンダム」と呼んでいる（大尾 2021）。

<sup>17</sup> なお、カイヨワ自身は「最後の二つ——規則と虚構——は互いにほとんど相いれないもの」（カイヨワ 1958=1990 : p. 41）としている。そのため、この辺りはもう少し詳細に検討する必要がある。

<sup>18</sup> カイヨワが俳優について述べている箇所を参照のこと（カイヨワ 1958=1990 : 92, 97-98）。したがって、アイドルが活動を止めれば、その存在自体が消えてなくなる。「遊ぶ」こともできない（というか、許されない）。『推し、燃ゆ』では、次のように表現されている。「もう追えない。アイドルでなくなった彼をいつまでも見て、解釈し続けることはできない。推しは人になった」（p. 121）。

<sup>19</sup> ミミクリの説明の箇所でも、カイヨワは「自己の他者化」という言葉も使っている（カイヨワ 1958=1990 : 54）。そのこと

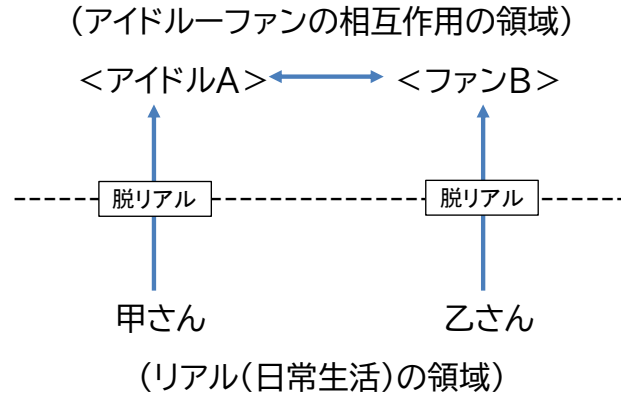


図 アイドルファン相互作用の虚構性(=脱日常性)

以上の説明してきたように、「推し活」は、「遊び」と捉えることができる。「推し活」とは、“アイドルとの虚構の関係の中でアイドルと戯れる”ことである。

社会学者の清水幾太郎は、「遊び」の領域を、カイヨワにしたがい「第二のリアリティ」と呼んだ(清水1966:389)<sup>20</sup>。そして、清水は「現実の労働の生活」を「第一のリアリティ」と名付けた。これらの言葉を流用させてもらうならば、日常世界を「第一のリアリティ」、そしてファン行為の領域を「第二のリアリティ」と呼ぶことができる。ファンの主観にとっては、“アイドルにファンとして出会う世界”もリアルな世界である。つまり、「第二のリアリティ」をなしている。アイドルファンとは、この2つのリアリティの間を行き来する存在といえるだろう。

### 「推しのいる生活」について

ここでは、「推しのいる生活」について考えてみたい。「推し」ができると、私たちの生活はどのように変わるだろうか。『推し、燃ゆ』は、「推しのいる生活」をリアルに描写した作品ともいえる。適宜、『推し、燃ゆ』からも引用しつつ説明する。

まず、生活の中心が「推し」と「推し活」になる。これが何より大きな変化である。『推し、燃ゆ』から抜粋してみよう。

あたしには、みんなが難なくこなせる何気ない生活もままならなくて、その躰寄せにぐちゃぐちゃ苦しんでばかりいる。だけど推しを推すことがあたしの生活の中心で絶対で、それだけは何をおいても明確だった。中心っていうか、背骨かな。(p.37)

ここでは、主人公にとって「推しを推すことがあたしの生活の中心で絶対」なのである。また、主人公は「背骨」とも感じており、それがないと「あたしの生活」自体が成り立たないのである。

「推しを推すこと」が中心になることは、たとえば、スケジュール管理にもあらわれる。ある雑誌記事に載っていた、「推し」のいる女性の言葉を紹介しよう。

によって、「現実から脱出する」のである。アイドルを演じる、ファンを演じることは、「自己の他者化」による、「現実からの脱出」ともいえる。もちろん、脱出の程度はさまざまであるが。

<sup>20</sup> 先に紹介した訳とはやや異なった訳になっている。原語は、私の参照したフランス語版では、“réalité seconde”であり(Caillois [1958]1967:43)、英語訳では“a second reality”である(Caillois 1958=2001:10)。

私は推しのスケジュールを軸に生活してる。テレビ出演やブログ更新日を見逃さないように自分の予定を組むの(笑)。他にも、グッズの購買やSNSのいいねやリツイートを、つい頑張りすぎちゃうんだなあ。

(『an・an』2021年4月7日号、p.131)

スケジュール管理が「推し」を中心に行われる描写は、『推し、燃ゆ』にもある。アルバイトのシフトを考える際の、主人公の思考を描写するところである。

幸代さんからメールが届き、寝転がりながらスケジュールアプリをひらく。予定は推しありきで決まるので人気投票の結果発表日は早上がりにもしてもらい、投票後の握手会の日は当然避ける。握手会のあとは余韻に浸りたいので一日空けておく。(p.38)

ライブではお金がいくらあっても足りないだろうから、結局ほぼ毎日シフトの希望を入れて出した。学校がないぶん今までより集中できるかもしれない、推しを推すだけの夏休みが始まると思い、その簡素さがたしかに、あたしの幸せなのだという気がする。(p.40)

時間のみならず、空間も「推し」中心に再構成される。こちら『推し、燃ゆ』から抜粋してみよう。主人公の部屋についての描写である。

この部屋は立ち入っただけでどこが中心なのかがわかる。たとえば、教会の十字架とか、お寺のご本尊のあるところとかみたいに棚のいちばん高いところに推しのサイン入りの大きな写真が飾られていて、そこから広がるように、真っ青、藍、水色、碧、少しずつ色合いの違う額縁に入ったポスターや写真で壁が覆いつくされている。棚にはDVDやCDや雑誌、パンフレットが年代ごとに隙間なくつめられ、さらに古いものから地層みたいに重なっている。新曲が発表されたら、棚のいちばん上に飾られていたCDは一段下の棚に収められて最新のものに置き換わる。(p.37)

「推しのサイン入りの大きな写真」を中心に、「そこから広がるように」ポスターや写真で壁が覆いつくされている。部屋の空間の中心もまた「推し」なのである。これは、ファンの心的なあり方をそのまま象徴したものになっている。

また「推し」ができると、「推しに関わるモノ・ヒト・コト」と「推しと関わらないモノ・ヒト・コト」に、日常世界は区別されるようになる。そして、できる限り、前者を優先しようとするだろう。それだけではない。「推し」の存在は、「推しと関わらないモノ・ヒト・コト」にも「意味」を与える。これも、あるジャニーズファンの言葉の紹介である。

私にとって、推しは“生きる糧”です。辛い仕事さえ、推しがいるから頑張れるので、存在そのものに感謝しています。(『月刊週刊女性』2020年9月号、p.119)

仕事自体は、「推し」とは関係ないものである。しかし、「推し」のおかげで、仕事にも頑張れるようになる。このような精神的な動機付けが“推し遊び”の効果であり機能である。カイヨワの定義をもとに「推し活」の遊戯的側面を検討した際に言及したが(本稿p.6)、確かに「生産物」を生まないものの、このような効果がある<sup>21</sup>。

<sup>21</sup> そのため、一口に「遊び」といっても、“推し遊び”と、気晴らしに行われるその場限りの「遊び」(たとえば、子ども

さらに付け加えておくと、「推し」とは、自分の存在意義であり、アイデンティティでもある。「〇〇推し」とは、「私は〇〇が好きな人間なのです」という自分のアイデンティティの表明である。そのため、「推しを推す」ことができないのは、自分の存在意義の喪失を意味する。「推しを推さないあたしはあたしじゃな」いのである（『推し、燃ゆ』、p.112）。

以上説明してきた通り、「推しのいる生活」とは、日常生活の中で、「推し」と「推し活」が最も重要となり、それによって日常生活が再構成されている状態と言えよう。いいえれば、「第二のリアリティ」の成立によって、「第一のリアリティ」が再編された状態と言える。

### “一方的だけど、一人じゃない”～“推しと私”の人間関係

先に紹介したように、『推し、燃ゆ』の作者である宇佐見は、アイドルとファンとの関係を、「一つの新しい人間関係」と評した。あらためて、引用しておこう。

私にも8年推している俳優さんがいるのですが、確かに、熱量の方向性で言えば一方的な関係です。どれだけ推してもほとんどの場合、パフォーマンス以外には向こうから返ってくるものはない。

だからといって、家族関係や友人、恋人関係といった、他の人間関係に引けを取るとは思っていません。それらと並ぶ、一つの新しい人間関係だと思っています。

この発言が興味深いのは、“従来の常識的な人間関係の感覚”に挑戦し、ゆらぎをもたらすものだからである（そこから逆に、世間が“人間関係”をどのように限定し、封じ込めようとしているかもみえてくる）。アイドルとファンとの関係に相互性はなく、「一方的な関係」のみがある。そのため、“従来の常識的な人間関係の感覚”からは、それを人間関係と呼べないように思われる。特にマスメディア上で活躍するメディアアイドルとファンとの関係は、「一方的」と言っていいたろう（地下アイドル（ライブアイドル）の場合は少々事情が異なる。池田（2021）を参照のこと）<sup>22</sup>。宇佐見は、それでもなお、この関係を「一つの新しい人間関係」と呼んでいるのである。

ここで、宇佐見がアイドルとファンとの一方向的な関係を「一つの新しい人間関係」と呼ぶことの意味を、私なりに考えてみたい。

先の引用した発言に続けて、宇佐見は以下のように語る。

例えば友人関係であれば、自分の言動によって友人との距離が縮まることもあれば、関係が壊れることもありますよね。／対して、この本に登場するあかりと推しとの関係は、一方的だからこそ、距離は離れることも近づくこともない。自分を受け止めて肯定してくれることはないけれど、否定もされない。／あかりは、自分の現状を誰かに受け入れてもらうことはとうに諦めていて、ただ自分からも他人からも否定される辛さは身に染みている。そういうとき、遠くにいるそうした存在が、癒やしになり、孤独を和らげてくれることがあるんだと思います。<sup>23</sup>（スラッシュ記号は、改行の意味。池田の補足）

---

たちが行う“鬼ごっこ”や“かくれんぼ”など）とは、大きく異なっている（カイヨワはどちらかといえば、さまざまな「遊び」の共通性を意図的に強調している（カイヨワ 1958=1990：117-118））。カイヨワの「遊び」の議論は、“日常生活とは異なったリアリティ”の存在を提起したところに、その価値があると言える。

<sup>22</sup> もちろん、関係が「一方的」であるか「双方向的」であるかも、相対的な問題である。

<sup>23</sup> 砂田明子、2021、「芥川賞受賞『推し、燃ゆ』の宇佐見りんが語る「“推し”と“癒し”の関係」 恋人とも家族とも違う、推しという存在」、『gendai.ismedia』、<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/80323?page=2>、最終アクセス 2021.04.25



宇佐見のこの考え方を表すような文章が、『推し、燃ゆ』にもみられる。主人公が“推しと自分”との関係について思いを巡らすシーンである。

見返りを求めているわけでもないのに、勝手にみじめだと言われるとうんざりする。あたしは推しの存在を愛でること自体が幸せなわけで、それはそれで成立するんだからとやかく言わないでほしい。〔中略〕携帯やテレビ画面には、あるいはステージと客席には、そのへだたりぶんの優しさがあると思う。相手と話して距離が近づくこともない、あたしが何かすることで関係が壊れることもない、一定のへだたりのある場所で誰かの存在を感じ続けられることが、安らぎを与えてくれることがあるように思う。何より、推しを推すとき、あたしというすべてを懸けてのめり込むとき、一方的ではあるけれどあたしはいつになく満ち足りている。(p.61-62、傍点は池田)

宇佐見の発言からもわかるように、また本稿でも述べてきた通り、「推し」は“遠い存在”である。関係も一方的である。にもかかわらず、「推しを推すとき」に「いつになく満ち足りる」のである。このように考えられる理由は何か。

まず「推し」は、主観的には、“支えてくれる存在”である。正確に言えば、“「こちらが『推し』を支える・応援する」ことで、自分自身が支えられる”関係と言える。そうであれば、“自分の現状を受け入れてくれない”身近な人間関係よりも（実際に相互作用がある存在よりも）、「推し」は“重要な他者”となるだろう。“身近な人々”は、支えになってくれないのだから。

それから、本稿で述べたように、「推し活」とは、一種の遊びの側面を持つ。それは“推し遊び”である。だから、アイドルとファンの関係は虚構的なものである。だからこそ、日常世界の中では表現できないことも表現でき、感情を発散することができる。「ガチ恋口上」のように大勢で叫ぶという形をとっているからこそ（＝虚構的だからこそ）、「好きだ」という気持ちを外に向けて表現できる。また、虚構の関係とわかっているからこそ、「好き」とか「愛している」とかという言葉、遠慮なく使うことができるのである。アイドルとファンとの関係は、虚構であるからこそ、許されないような感情表現の許される場所となっているのである。カイヨワがいうように、遊びの領域とは「純粹の世俗」なのである（カイヨワ 1958=1990 : 301）。

最後に、アイドルオタクの内的な体験として、推すことが義務に感じられることがある。“自由に選び、参加できる”はずが、“〇〇しなければ！”という意識を持つてしまうのである。

この心的状況を、私は“被占有感”と呼んでおきたい。自分の心が、誰かに“占有されている”感覚である。これは、その人の心の中に、アイドルがしっかりと存在していることの証であるといえよう。先の引用から言葉を借りれば、「一定のへだたりのある場所で誰かの存在を感じ続けられる」状態である。「推し活」は、アイドルによる“被占有感”を楽しむ遊びともいえる。私は、このように自由な関係が「義務的」になるとき、“推しは推しになる”と考えている<sup>24</sup>。

以上述べてきた3点、すなわち“遠いけれども、支えてくれる存在であること”、“虚構だからこそ、普段表現できないような感情が発露できること”、“義務的な感情を持つてしまうこと”から、私は、アイドルとファンとの関係は、“一方的だが、一人じゃない”関係と捉えておきたい。“一人じゃない”という意味で、“一つの間人間関係”といえる。また“一方的”という意味で、“新しい”人間関係と解釈できる。もちろん、“新しい”の意味は、“その関係を人間関係呼ぶこと”自体が新しいという意味である。

<sup>24</sup> カイヨワ自身は「逃避であったものが義務になる」現象を、“遊びの腐敗”とみていた（カイヨワ 1958=1990 : 91）。私が述べているのは、そうした“遊びの腐敗”、つまり本能的衝動が遊びの領域を超えて現れる場合ではない。あくまでもその義務感を楽しんでいるのである。“遊びの腐敗”は、アイドル個人に恋愛感情を抱き、アイドルとファンの関係を逸脱した行為に当てはまるだろう。

『推し、燃ゆ』は、従来の人間関係のあり方に疑問を呈し、また異なった人間存在のあり方をあらためて提示した。あくまで個人的な見解だが、その意味で『推し、燃ゆ』すぐれた作品だと言える。

## おわりに

本稿では、『推し、燃ゆ』の作者・宇佐見りんの言葉の解釈を導きの糸としつつ、「推し」や「推し活」、「推しのいる生活」、そして「一つの新しい人間関係」として“アイドルファン関係”について考えてきた。

まず、「推し」とは、“大好きな人”で“日常生活の外の人物”あるいは“自分にとって手の届かない人物”と定義した。つづいて、「推し活」は、アイドルを相手になされる一種の遊び、すなわち“推し遊び”だととらえた。その議論を補強すべく、つづいて有名なカイヨワの「遊び」の定義を援用し、「推し活」が「遊び」にあてはまることを明らかにした。そして、「推しのいる生活」とは、日常生活の中で、「推し」と「推し活」が最も重要となり、それによって日常生活が再構成されている状態であると指摘した。

最後に、アイドルとファンとの関係を、どのような意味で「人間関係」と呼べるかを議論した。①“遠いけれども、支えてくれる存在であること”、②“虚構だからこそ、普段表現できないような感情が発露できること”、③“義務的な感情を持ってしまうこと”の3つの理由を指摘した上で、私は、アイドルとファンとの関係は”一方的だが、一人じゃない”関係ととらえられると結論づけた。

カイヨワ自身は、スターを信仰するファンを“無力な存在”として描いている（カイヨワ 1958=1990 : 201-211）。それゆえ、ファンたちはスターに自分を同一化（投影）し、自分のみじめさを忘れるのである。

なるほど、カイヨワのいうような「同一化」の側面は、全くないわけではないだろう。女性アイドルファンの女性の中には、アイドルに同一化する者もいると思われる。“何ものでもない自分”から“何者か”になるうとして、アイドルにあこがれる。一部のものは、実際に踏み出す。“陰キャだった私がアイドルになることで救われた”という言説は、しばしば、アイドルからも聞かれる。

しかし、そのようなファンばかりではない。確かに熱心に「推し活」しているが、純粹に“遊び”として楽しんでいる者も多いのではないだろうか。

現在、“推し活”や“推しのいる生活”といった言葉は、消費を煽るための言葉にもなっている。また、いうまでもなく“推し過ぎ”（ここでの造語：推し活に熱中するあまり、日常生活に著しく支障が出ているような状態）にも注意である。その2点に留意しつつ、“推し遊び”を遊び、“(空想的だけでも、リアルな) 絆を感じる”ことは、私生活に彩りをもたらす。自分の支えにもなる。

こうした“遊び”を、全否定することなく、かといってもろ手を挙げて歓迎するわけでもない。そうした“距離感”を、世間に、そして実際に「推し」のいる人々にも伝えるために、ファン研究は重要な営みだと言えるだろう。

## 【参考文献】

池田太臣、2020、「エッセイ「特撮女子」に想う～「推し」が生活は、社会に受け入れられるのか?～」、『女子学研究』Vol.10、pp.10-11、[http://www.joshigaku.net/\\_src/sc1261/ikeda2020.pdf](http://www.joshigaku.net/_src/sc1261/ikeda2020.pdf)、最終アクセス 2022.4.8

池田太臣、2021、「『視線の相互性』をもとめて：ライブアイドル体験の『感覚の社会学』的理解」、『甲南女子大学研究紀要 I』（人間科学編）57号、pp.163-170

大尾侑子、2021、「デジタル・ファンダム研究の射程——非物質的労働と時間感覚にみる『フルタイム・ファンダム』」、伊藤守[編著]『ポストメディア・セオリーズ メディア研究の新展開』ミネルヴァ書房、pp.208-232

清水幾太郎、1966、『現代思想』（下）、岩波書店

- ダナ・ボイド、2014、『つながりっぱなしの日常を生きる: ソーシャルメディアが若者にもたらしたもの』  
(=2014、野中モモ訳)、草思社
- ロジェ・カイヨワ、1958、『遊びと人間』(=1990、多田道太郎・塚崎幹夫訳)、講談社 (講談社学術文庫)
- Caillois, Roger, [1958]1967, *Les jeux et les hommes : le masque et le vertige*, Paris: Gallimard.
- Caillois, Roger, 1958=2001, *Man, play, and games*, translated from the French by Meyer Barash, University of Illinois Press.